



海援隊旗(ニ曳きの旗)

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/>

入館者100万人達成!

名古屋市の池崎さん

高知旅行で幸運!!



三月八日、坂本龍馬記念館に新しい歴史が刻まれました。一九九一年(平成三年)十一月十五日の開館以来十五年四ヶ月近いこの日、二百万人目の入館者を迎えるました。

記念すべき二百万目は、名古屋市から来た池崎武さん(七七)。

客船「飛鳥」で高知旅行に来られた方です。池崎さんは「びっくりしました。初めて来た高知でこんな機会に巡り合うなんてうれしいです」と話していました。

十五年余りの歳月には龍馬ファンのみならず、就職、結婚、子どもたちの誕生など人生の節目に再訪される方、また挫折や迷いの中で龍馬や自分自身と語り合っている方など、様々な思いを持った方が、年間十二、三万人当館へ来られています。

い施設とも比べても遜色なく、また個人の顕彰館、特に歴史部門では国内トップレベルの数字です。(昨年度、歴史系博物館一、〇三八館の年間平均入館者数は約三万八千人)日本博物館協会調べ)。また、開館当初の入館者が

混迷する社会の中で悩みや迷いを持つた方たちが龍馬と対話しようとやつてくる姿は、まさに今の社会を映す鏡のようにも思われます。また、龍馬を感じ、龍馬の見た海を楽しんでいる様子は、今まで入館した二百万人の皆様それぞれに通じるものでしょう。

記念すべき日を迎え、新たなスタートを切った記念館を今後ともよろしくお願ひいたします。

毎年減っていく傾向がある中、当館では年間十一万から十三万人という入館者は変わることありません。特に二〇〇六年度は「坂本直行」展開催による入館者増も功を奏し約十三万五千の方が龍馬記念館を訪れました。

入館者200万人突破! “早足の足跡” 龍馬人気に支えられ 館長より感謝の挨拶

「ひとえに県内外から、来館いただいた方々の“早足の足跡”だと思います。同時に“龍馬はすごいぞ”、改めてそのことを認識させられました。坂本龍馬記念館は新たなるスタートラインに立ちました。目標は300万人です。前進あるのみ、よろしくお願ひいたします」



好評だった反骨の農民画家「坂本直行」展

感動とともに閉幕

三月末日までの約四ヶ月半、百四十日にわたる会期中、約四万五千人の方がご来館くださいました。この数字は入館者数が落ち込むこの時期にしては異例のこと。また、高知県民の皆様がこれほど多く来てくださいましたことでも今までないことがありました。

期間中に開館以来二百万人目の入館者が出ていたといううれしいおまけもありました。

「主役」は言うまでもなく「直行の絵」と「龍馬の手紙」。二人の「競演」でした。その側を、多くの「脇役」が固めました。

「おかげりー直行さん」。各会場にこの言葉がありました。味わいのある字体は書道家、沢田明子先生のものでした。土佐藩の上士と下士の対立を考察し、暗殺の土佐藩黒幕説の背景を展示する。

暗殺一四〇年！ 時

三館（歴民・龍馬記念館・慎太

「坂本龍馬・中岡慎太郎」展

期間・平成十九年七月一

今年は龍馬と慎太郎が暗殺されても展示を行い、メンバーコンペと活動内容について考察する。また、武市半平太の存在の位置付け及び活動内容について再考する。資料は、慎太郎館や当館と中岡慎太郎の政治構想を取り上げたり、土佐藩の上士と下士の対立を考察し、暗殺の土佐藩黒幕説の背景を展示する。

慎太郎館では、土佐勤王党を中心に展示を行い、メンバー構成と活動内容について考察する。また、武市半平太

と中岡慎太郎の政治構想を取り上げたり、土佐藩の上士と下士の対立を考察し、暗殺の土佐藩黒幕説の背景を展示する。

「龍馬記念館の展示」「海援隊と陸援隊」展

期間・平成十九年七月二十八日（土）

～九月三十日（日）

当館では、坂本龍馬と中岡慎太郎を考える上で、最良のテーマである海援隊と陸援隊を中心に展示を行う。活動

和紙の土佐寒蘭を制作してくれたのはアートフラワー作家の伊与田節子さんです。館内に九個。きりつと存在感を主張していました。高岡丑製紙研究所の協力も大きな力でした。和紙の演出がどれだけ会場の雰囲気を和やかなものに作り上げたか。それはデザインの用に生け花をお願いしました。野草の表情を見事に捕らえた独特的の空間が多く人の目に留まつたのは言うまでもありません。

さて、驚かされたのは高知の方からのこんな質問でした。「そちらの記念館はどこにあるのですか?」。正直、苦笑いでした。龍馬の知名度と裏腹に、当館や龍馬への県民の皆さんの関心がいかに低いか。いまさら龍馬なんてという土佐人特有の身内意識の表れなのでしょうか。嘆くより当館の課題がはつきりと認識できる質問になつたと思ひます。

ただ、初めて來たという高知の方が、「龍馬がこんなこと書いちゅうで」「面白いねえ」「すごい人ながやねえ」と、展示ケースに額を押しつけるようにして龍馬の手紙を読んでいる姿や、館二階の南端「空白のステージ」に立つた皆さんのが外を見て「きれいな海やねえ。高知にこんな所があるなんて知らんかった」という声を上げるのを聞いたときは、館長以下職員一同我が意を得た

暗殺一四〇年！時代が望んだ命か？

今年は龍馬と慎太郎が暗殺されてから一四〇年目に当たる。そこで、高知県内の三館（高知県立歴史民俗資料館・北川村立中岡慎太郎館・当館）が連携して、合同企画展を開催する。

【歴史民俗資料館と中岡慎太郎館】

歴史民俗資料館では、総論としての展示を行い、幕末維新期における二人の存在の位置付け及び活動内容について再考する。資料は、慎太郎館や当館では展示できない国的重要文化財などを中心に展示する。

慎太郎館では、土佐勤王を中心とした展示を行い、メンバー構成と活動内容について考察する。また、武市半平太と中岡慎太郎の政治構想を取り上げたり、土佐藩の上士と下士の対立を考察し、暗殺の土佐藩黒幕説の背景を展示する。

【龍馬記念館の展示】

「海援隊と陸援隊」展

期間：平成十九年七月二十八日（土）～九月三十日（日）

当館では、坂本龍馬と中岡慎太郎を考える上で、最良のテーマである海援隊と陸援隊を中心に展示を行う。活動

内容などや、両隊を背景とした龍馬と慎太郎の政治ビジョンも明らかにしたい。その上で、暗殺の紀州藩黒幕説が生まれた、海援隊のいろは丸事件の展示も行う。

【翔天隊】

さて、まずここでは海援隊と陸援隊の位置付けを簡単に説明しておきたい。

両隊は、慶応三（一八六七）年四月に、土佐藩の外郭団体的な組織として結成された。隊長である龍馬と慎太郎は共に脱藩者であったが、この年の三月に罪が許され、土佐藩へ復帰した。しかし、この脱藩罪赦免は、後藤象二郎や福岡藤次ら一部の上士によつて画策されたもので、正式なものではなかつた。そのため、兩人が暗殺された十一月十五日の土佐藩重役の一人・寺村左膳の日記には、暗殺の事を記した後に、次のように書かれている。

然るに此者兩人とも近比之時勢ニ

元御国脱走之事故未御國之命令を以
兩人とも復籍の事ニも相成ず、其儘
ニ致し有し故表向不関係之事。
このように、脱藩罪赦免は十一月に
よつても土佐藩からは正式に認められ
おらず、兩人が暗殺された事について
、土佐藩としては「表向きは関係あ
ざるの事」だったのだ。
したがつて、海援隊と陸援隊につい
ても、正式な土佐藩の組織ではない
龍馬の姉・乙女は、龍馬が姦物役人の
後藤らにだまされて、都合の良いよう
に利用されているのではないかと心配
し、手紙を送つてゐる。その原物は残
していながら、六月二十四日に龍馬が
書いた長文の返信に、そのような心配
は無用だとという意味が書かれている。
後藤は土佐随一の人物だと。また、こ
の手紙には、「廿四万石を引いて天下
國家の御為致すが甚よろしく」とあり
正式な復帰は、あまり大きな意味を持
たなかつたのだろう。海援隊も陸援隊への
龍馬や慎太郎にとって、土佐藩への
入隊の第一条件は「脱藩の者」だつ
た。後藤らとしても、この両隊を藩の
組織として厳しく管理するつもりはな
かつた。福岡藤次は両隊について、次
のように記している。

のの、純然たる、土佐の家来と云ふ訳ではないから、天下憚る者なく、横行闊歩し、と語つてゐる。

このため、資金の面も、基本的には土佐藩を頼ることなく、自分たちで稼がなければならなかつた。また、陸援隊の資金も海援隊の利益でまかなうはずだつたが、いろは丸事件で船を失つたことなどが原因で、結局は長崎にいた土佐藩役人の岩崎弥太郎を頼る事があつた。

組織の性格としては、海援隊は前身である龜山社中の頃から変わらず、商社の色が濃い。しかし、有事の際には海軍としても活躍できる準備は整えられていた。これに対して陸援隊は、諜報機関の役割を担つてはいたが、討幕へ向けた陸軍としての色が濃い。

この両隊は、龍馬と慎太郎の死後間もなく両隊とも解散した。龍馬と慎太郎はこの隊を使つてどのようなビジョンを描いていたのだろうか。それについては、次号で触れてみたい。

反骨の農民画家「坂本直行」展 感動とともに閉幕

反骨の農民画家「坂本直行」展 感動とともに閉幕

のに作り上げたか。それはデザイインの協力者、森木裕貴さんの腕の見せ所でもありました。また、後半、「草木花塾」を主宰する郷田八代さんには入口正面用に生け花をお願いしました。野草の表情を見事に捕らえた独特的の空間が多く人の目に留まつたのは言うまでもありません。

さて、驚かされたのは高知の方からのこんな質問でした。「そちらの記念館はどこにあるのですか?」。正直、苦笑いでした。龍馬の知名度と裏腹に、当館や龍馬への県民の皆さんの関心がいかに低いか。いまさら龍馬なんてという土佐人特有の身内意識の表れなのでしょうか。嘆くより当館の課題がはつきりと認識できる質問になつたと思ひます。

ただ、初めて来たという高知の方が、「龍馬がこんなこと書いちゅうで」「面白いねえ」「すごい人ながやねえ」と、展示ケースに額を押しつけるようにして龍馬の手紙を読んでいる姿や、館二階の南端「空白のステージ」に立つた皆さんのが外を見て「きれいな海やねえ」。高知にこんな所があるなんて知らんかった」という声を上げるのを聞いたときは、館長以下職員一同我が意を得た

「龍馬の殿堂」へ向かって

「龍馬の殿堂」
当館の入館者数二百万人到達は、歴史系博物館としては非常に早いペースだが、肝心の中身である展示面積は、順調な道のりを歩んできたわけではない。
開館当初は、「見るものが何もないじゃないか！」という声を聞くことが何度もあった。しかし、故・宮地佐一郎先生をはじめ、多くの方に支えられ、職員の努力もあり、百五人目をお迎えした八年目には、不満の声がかなり減っていた。その頃には「龍馬への入口」としての役割を果たせるようになっていた。

現在所蔵している歴史資料は約三百点で、決して多い数ではないが、貴重な資料が増えている。長期預かりの資料も含めると龍馬の資料が七点、武市瑞山の四点、中岡慎太郎が一点、その他、木戸孝允や高杉

心より感謝申しあげます。ありがとうございました。
主任 前田 由紀子

りの思いでした。まさに直行さんのおかげであります。

外への持ち出しにご協力いただき、いくら感謝の言葉を言おうとも足りるものではありません。

拝啓龍馬

12月21日～3月20日

96通



模様替え

わたしは今学校で「高知のえらい人について調べています。わたしは「龍馬」という名前しか知らないで、あまり何をした人が知らなかつたけど、龍馬のことがもっと知りたくてきました。これからもうちょっとのことをもっと調べてみたいと思います。

(12月24日 南国市 Y・T 9歳 女子)

市内に住んでおりますが、久しぶりに来て坂本直行の作品と生き方に感動を覚えました。そして龍馬記念館という立派的な建築物としての作品にも。屋上まで上ったのは始めてです。そして二階ですが、前面の真南に太平洋を望み、眼下に打ち寄せる白い波を見下す椅子のある空間も素晴らしい。県外客に誇れる土佐のグローバル作品群だと実感いたしました。

(12月25日 高知市 T・M 70歳 男性)

市内に住んでいますが、お母さんに聞いて龍馬のことをもうと知りたいです。

(12月27日 岩手県 R・M 9歳 女子)

龍馬記念館に初めて来て、色々な龍馬の写真や物などを見て、龍馬と龍馬の仲間のことが少し分かりました。お父さんとお母さんが龍馬に興味があつて高知に来ました。分からないことがたくさんあるけど、お父さんとお母さんに聞いて龍馬のことをもうと知りたいです。

(12月29日 高知市 Y・Y 38歳 女性)

主人は龍馬さんのファンです。息子に「龍馬が行く」から龍行と名付けました。大阪に住んでいますが、その頃から京都の龍馬さんゆかりの場所へ何度も行きました。今年、高知へ転勤になり喜んで来ました。それも人事に龍馬ストラップを見られたのが原因です。太平洋は本当に広いですね。ここに来られてよかったです。

(1月1日 大分県 Y・N 43歳 男性)

明けましておめでとうございます。昨年初めて訪れた記念館に感動し、中一の次男だけを連れて大分から來ました。次男の名前は「直柔」です。龍馬さんの様な大きな人間になることに願いを込め拝借しました。しかし、最近色々な面で(野球や勉強伸び悩んでいるようなので何かのきっかけになればと願い思い切ってやつて来ました)。龍馬さんのパワーを直柔に授けてやつてください。お願いします。次は家族でやつて来たいと思います。ではまた会いましょう。

(1月16日 倉敷市 M・W 56歳 男性)

龍馬に会いに来ました。やはり龍馬が好き。難しい

ことは分からぬけれど、龍馬に惹かれています。こんなに大勢の人々に想われる龍馬、みんな同じキモチになつて驚きました。今、会えたなら…と思います。

(1月30日 大阪市 M・N 26歳 女性)

明けましておめでとうございます。昨年初めて訪れた記念館に感動し、中一の次男だけを連れて大分から來ました。

次男の名前は「直柔」です。龍馬さんは日本人に想われる龍馬、みんな同じキモチになつて驚きました。今、会えたなら…と思います。

ここは館長の部屋

森 健志郎

「座るところはないかえ」。少し背中が曲がり気味のおばあさんが、とんとんお腰をたたきながら言う。坂本直行展観覧に来られたのは、手提げバックからぞく図録で分かった。直行展第三会場。和紙を使った直行さんのアルバム展示をしてある会場である。指摘されて分かった。なるほど、見渡したところに腰掛け見えない。おばあさんは、常設展の展示台にひょいと腰掛けてしまった。「いけない」とも言えず苦笑い。おばあさんはあつけらかんと「面白いけど、疲れたぞね」。

展示コースは、エレベーターを使わないと正直疲れる。若い人はなままだ鉄製の螺旋階段を楽しむ余裕もあるだろう。しかしお年寄りには息切れがする。一服したくなる。それに二階からは太平洋が目の前に広がる絶景とくれば、「おおの!

歩いてみたらうなずける。地下一階から地上二階へ上がるだけを連れて大分から來ました。

次男の名前は「直柔」です。龍馬さんは日本人に想われる龍馬、みんな同じキモチになつて驚きました。今、会えたなら…と思います。

うまくゆけばその思いに応えられるかも知れない。というのも館の中二階、「海の見える」ぎやらりとして利用して休み場所が少ない。というのは入館者の皆さんからのご意見である。

間に入ると誓つて、二度目はお腹にいる子と一緒に愛と笑いあふれる人生を歩むと誓いに来ました。

私は自分に負けないよっ! これかうどんな逆境があろうとも笑ってみせる。自分が自分らしくあるように。またあなたに熱いソウルとパワーをもらつた! ありがとう!

お腹にいる子は私が好きな「太陽」と龍馬が見つめている「太平洋」から「太洋」にするよーありがとう。大好き。

念願の高知に来れてとてもうれしいです。桂浜か

う。大好き。

膨らむ夢の最後を聞いてください。地下一階展示室の大改装です。重要な文化財でも展示できる本格的な展示室にすべくまさに検討中。力、貸してください。

考えています。

そう、ギャラリーは一階に移します。ギャラリースペース確保のために、一階南端「空白のステージ」は広くします。邪魔になってきた飾り物は撤去して、広くなつた空間では、ち

ょっとしたコンサート、パフォーマンスにも使えるようになります。

今年度は、入館者数や企画展において、おおよそ目標を達成できている。

全体的には、県民の皆さんにある程度の評価を頂いたと総括した。ただ、将来に向けて課題もあり、直接的には貴重な資料の充実、さらに館外への、特に学校を中心とする子供たちへのアピールが大切だと確認しあつた。

今年度の第一回目の運営協議会を平成十九年二月六日に、桂浜荘会議室にて行つた。

内容は、今年度の館の運営状況や企画展の報告を行つた後、来年度の企画の改設計画や、休憩コーナーの新設についても報告し、ご意見を伺つた。

今年度は、入館者数や企画展において、おおよそ目標を達成できている。

全体的には、県民の皆さんにある程度の評価を頂いたと総括した。ただ、将来に向けて課題もあり、直接的には貴重な資料の充実、さらに館外への、特に学校を中心とする子供たちへのアピールが大切だと確認しあつた。



急ごう展示環境の整備

平成十八年度運営協議会 十八年一定の評価得る

今年度の第一回目の運営協議会を平成十九年二月六日に、桂浜荘会議室にて行つた。

内容は、今年度の館の運営状況や企画展の報告を行つた後、来年度の企画の改設計画や、休憩コーナーの新設についても報告し、ご意見を伺つた。

今年度は、入館者数や企画展において、おおよそ目標を達成できている。

全体的には、県民の皆さんにある程度の評価を頂いたと総括した。ただ、将来に向けて課題もあり、直接的には貴重な資料の充実、さらに館外への、特に学校を中心とする子供たちへのアピールが大切だと確認しあつた。

今年度の第一回目の運営協議会を平成十九年二月六日に、桂浜荘会議室にて行つた。

内容は、今年度の館の運営状況や企画展の報告を行つた後、来年度の企画の改設計画や、休憩コーナーの新設についても報告し、ご意見を伺つた。

今年度は、入館者数や企画展において、おおよそ目標を達成できている。

龍馬スピリットで

私達の薩摩龍馬会が発会して十二支が一周しました。皆さんもご存知の通り、薩摩からは明治維新の折、多くの偉人を輩出しております。その鹿児島の地にあって、敢えて龍馬にこだわる事には、多くの地元の方々は違和感を覚えたことでしょう。しかし、我が薩摩龍馬会は以下の如く会の総則で述べています。「本会は薩摩龍馬会という。我らがふるさと霧島温泉は坂本龍馬が最愛の妻「お龍さん」と訪れた日本最初の新婚旅行の地。龍馬に「この世の外かと思われ候程のめずらしき所」と言わしめた自慢の場所。ここに暮らす我々は、日本の歴史を動かした龍馬をはじめ、龍馬に関する歴史上の人物と時空を超えて語り合うことで、郷土の素晴らしい自然、歴史、文化を深く掘り下げる。そして、歴史に学び、歴史を活かしたふるさと創りに努め、龍馬の発想力、行動力、先見性を学び、龍馬の如く新しい時代に向かって、一度しかない人生を明るく、力強く生きようではないか」。この様な気持ちで観光客が減少傾向にあった霧島温泉の活性を願って、日本最初の新婚旅行を龍馬が行っ

たと言う歴史的な史実を活かしたウォーキング大会を企画、立案、実施にこぎつけたのであります。今年も第11回目となる大会が2月24・25日に無事行われました。今年は全国より約3500名もの参加者がありまして、多いときで約6千名以上、平均でも3千人以上の参加者を集めるイベントとして定着いたしました。今年からはJR九州の全面協力を頂くなどして南九州の重要な観光ソフツになりつつあります。「何故、鹿児島で龍馬なのだ」という疑問には具体的に汗をかいて多くの方に喜んでもらえるしかないと、この10年間頑張ってきた甲斐もあり、昨年、県都鹿児島市にようやく鹿児島龍馬会が誕生。今年2月22日には伊藤鹿児島県知事、森鹿児島市長を迎えて発会式がありました。我が薩摩龍馬会会長の前田霧島市長と合わせて3人が揃った姿には感動を覚えました。鹿児島では西郷隆盛の事だけはよく語られることはありますが、龍馬を通じて、違った角度、切り口から歴史を語る事も大事ではないかと思います。時代が大きく変わりつつある今こそ、龍馬の精神(スピリット)が大事なのではないでしょうか。この龍馬スピリットで歴史を活かした社会創り、街づくりの輪が鹿児島の地に拡がりつつあります。

薩摩龍馬会事務局長 中堀清哲

「よみがえった月琴」幕末の音色に酔う

坂本直行展関連行事として、1月28日に「清らかに、やるせなく」～オカリナと月琴・出会いのデュエット～というコンサートを開催しました。直行さんのいた北海道十勝管内、六花亭本社のある帯広市出身でオカリナ奏者・本谷美加子さん(写真・右)と、東京在住でハープ奏者・大村典子さん(左)による演奏会。

このコンサートでは当館所蔵の月琴を初めて楽器としてご披露しました。当館の月琴は1993年に長崎・小曾根家から購入し、14年間資料として展示、保管してきたもので、幕末にお龍が弾いたものと同じタイプだとされています。コンサートにあたって、14年の間に傷んでいた個所を修繕し、ハープ奏者の大村さんに演奏してもらいました。大村さんが奏でる140年前の月琴の音曲・音色、またオカリナやハープに参加者160名はうっとりと聴き入っていました。

※今回、参加希望やリクエストなど数多くいただきました。それにお応えして、9月23日(日)にアンコール公演を開催します。

◇前号「月琴の魅力」で『記念館所蔵の月琴』とあった写真は、長崎明清楽保存会所蔵の月琴でしたので訂正します。



入館状況

2007年3月20日現在(開館以来5,592日)

◆総入館者数	2,005,605人
◆2006年度最多入館 5月4日	2,928人
2006年度最少入館 6月27日	62人
2006年度1日平均入館者数	379人
◇最多入館 1993.5.3	3,700人
◇最少入館 2004.10.20(台風のため)	8人

編集後記

めまぐるしく、慌しく時が過ぎてゆく。「坂本直行」展が終わった。年末年始休みなしの突貫工事、一瞬息も上がったが入館者の皆さんのが姿を見て満足した。次の波は“入館者200万人達成”。15年で200万人の来館者は大きい。さすが龍馬の底力だ。このパワーを借りて、4月からの所蔵品展、夏休みの“暗殺展”……ああ！息つく間もない。(モ)

館だより“飛騰”第61号(年4回発行) 表紙題字：書家 沢田 明子 氏

発行日 2007(平成19)年3月28日

発行 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/>

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般400円・高校生以下無料

(企画展開催時は別料金)

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください